論　文

福建山地農村における同族結合と社会主義建設

—安溪施氏一族の系譜と分節—

石　田　　浩

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．安溪施氏一族の系譜
　1．安溪県と龍門鎮山美村の概況
　2．安溪施氏一族の系譜と分節
Ⅲ．社会主義建設と同族
　1．安溪県龍門鎮の行政区画の組み換え
　2．同族の下位集団・分節と地域集団・角路との関係
Ⅳ．同族組織と華僑・華人
　1．安溪県出身華僑・華人と経済建設
　2．華僑・華人と同族祭祀の復活
Ⅴ．結語

Ⅰ．はじめに

河南省新鄭県に源流をもつ施氏一族は華北各地を移動して，河南省光州府固始県に落ち着き，さらに華北での戦乱や飢饉を避けて最終的には福建省へ移住した。福建に定住後，一族は省内各地を移動・分節し，台湾をはじめとしてフィリピンやシンガポール・マレーシア・タイ・インドネシア・香港・マカオなど，東南アジア一帯に移民した。この点に関してはこれまでの研究で明らかに

してきた[1]。台湾へ移民した施氏一族の大部分は福建省晋江市の出身であり，台湾施氏一族は台北をはじめ台中・彰化・嘉義・台南・高雄の各地に宗親会を組織している。しかし，嘉義県施姓宗親会の施氏一族のみは福建省安溪県龍門鎮の出身であり，中部台湾の彰化県鹿港鎮に集結する施氏一族とはその出身地を異にしている[2]。

過去7回の調査では晋江施氏の歴史やその分節，解放後の社会主義下の族的結合，海外との関係について調査したが，今回は安溪施氏の系譜や分節，その歴史や同族結合，さらには解放後の社会主義改造・建設の中で過去の同族組織がどう変容したのか。そして，1970年代末の改革・開放以降，同族組織がどのような形態で存在し，海外華僑や華人とのネットワークがどのように再組織化され，現在に至っているのか。このような視点から，今夏，福建省安溪県龍門鎮を訪問し，安溪施氏一族について調査を実施した[3]。

本稿では，沿海地の晋江県から少し内陸の山地へ移住した，安溪施氏の系譜や分節を考察し，1949年以降も同族組織がどのような形態で存続してきたのかをあわせて考察する。また，晋江施氏の系譜や分節との比較考察や，外国在住の華僑・華人とのネットワークの考察をも行う。

II．安溪施氏一族の系譜

1．安溪県と龍門鎮山美村の概況

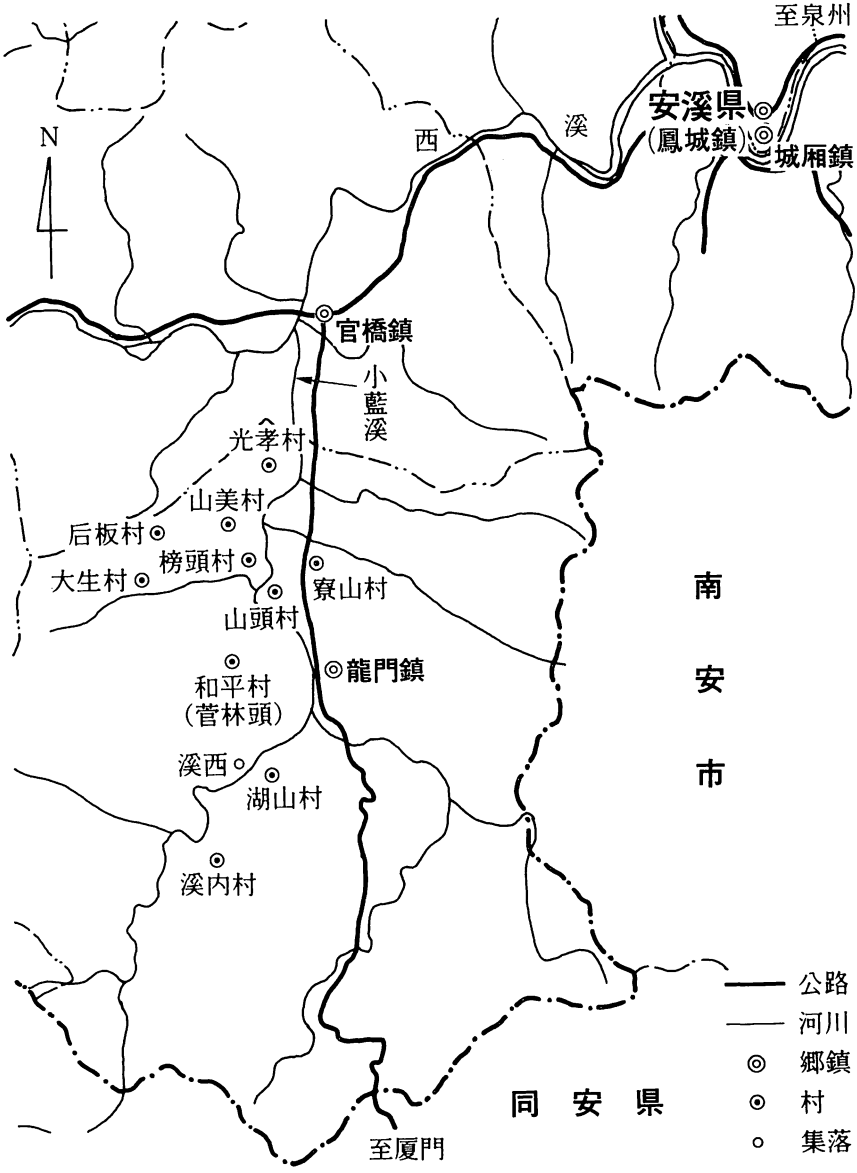
安溪県は，福建省の東南部，泉州市東南隅に位置し，東が南安県，西は華安県，南が同安県，西南が長泰県，北は永春県，西北が漳平市に接する。東西約74km，南北63kmで，総面積が3,057km²，人口96万人で，5鎮19郷，9国営農・林・茶場を管轄している[4]。交通の便は厦門から同安を経て安溪へ行くか（55km），厦門から泉州・南安を経て安溪へ行くかの二通りがある。現在，福建省各地では道路建設が行われ，厦門～同安～安溪は悪路のため厦門～泉州・南安～安溪のコースを走った。それでも途中で道路建設が行われており，距離に比して時間を要した。また，漳州からの鉄道が安溪県を通過し，泉州市から隣県の恵安

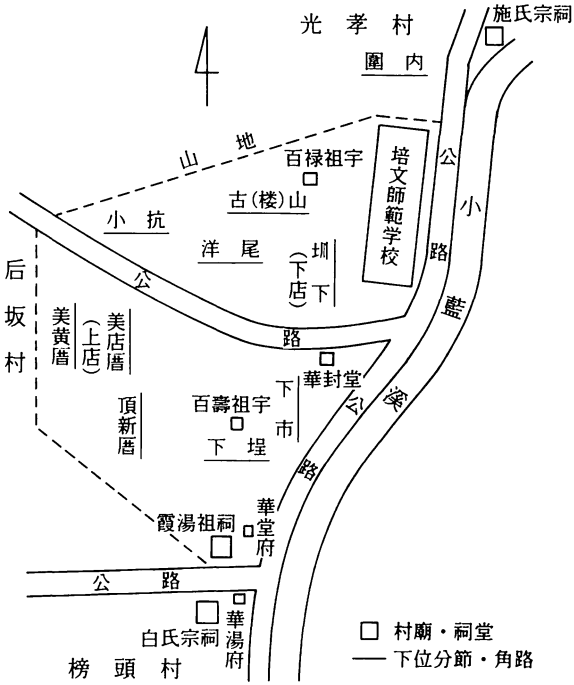
県へと建設中である。福建省地図を見ると，安溪県は比較的沿海に属しているが，周囲は全て山々で，わずかに晋江の上流・西溪沿いに開けた盆地があり，そこに県城の鳳城鎮がある。

安溪は山地農村であるため，農業以外の産業は発展していないが，烏龍茶の産地として殊に有名で，山地には茶畑が多い。工業は未発達であり，改革開放後も郷鎮企業は発展していない。その最大の理由は福建省が台湾の対岸に位置するため，過去において戦略上，国家の工業投資がほとんど行われず，交通の便も悪いため外国からの投資もこれまでは少なかったことによる。現在，建設中の公路（厦安公路と泉安公路）が完成すれば厦門から約２時間，泉州から約１時間半で県城に到達することができるようになり，外資の誘致に期待が持たれている。

安溪県の歴史を調べると[5]，955年に現・安溪県に清溪県が設置され，1121年に安溪県となった。現在は泉州市の管轄に属する。安溪県龍門鎮は宋代において帰善郷依仁里に属し，明清代においても依仁里に属し，その中に光孝郷や山尾（美）郷・榜頭郷といった名前が見られる。民国時期に行政区画は大きく変化し，1945年10月15日に全県の保甲制が19郷鎮に整理され，現・龍門鎮は龍榜鎮という名前で，12保で構成された。その中の山美保に調査した山美村や光孝村の名前が見られる。

安溪県は13鎮11郷で構成され，龍門鎮は第１図に見られるように同安県と南安県との県境にあり，そこには厦門に通じる公路が走り，最も厦門に近い郷鎮である。龍門鎮へは県城から建設中の悪路を小藍溪に沿ってジープで約１時間ほど走ったところに位置する。調査村の山美村へは官橋鎮の中心地を通り，官橋鎮との鎮境を通過すると，光孝村に到り山美村へ到達する。山美村への入口にはインドネシア華人の施金城等の寄付で建設した培文師範学校（中等師範学校）の表示があり，そこを右折して小藍溪に架かる橋を渡ると光孝村へ出る。そこをさらに奥に進んで行くと小藍溪に沿って培文師範学校がある。第２図に見られるように，培文師範学校に沿って小藍溪の横を走ると，そこが山美村で


至泉州
安溪県
(鳳城鎮)
城廂鎮
西
溪
N
官橋鎮
小藍溪
光孝村
山美村
后板村
榜頭村
大生村
寮山村
山頭村
龍門鎮
和平村
(菅林頭)
溪西
湖山村
溪内村
南安市
同安県
至厦門
公路
河川
郷鎮
村
集落

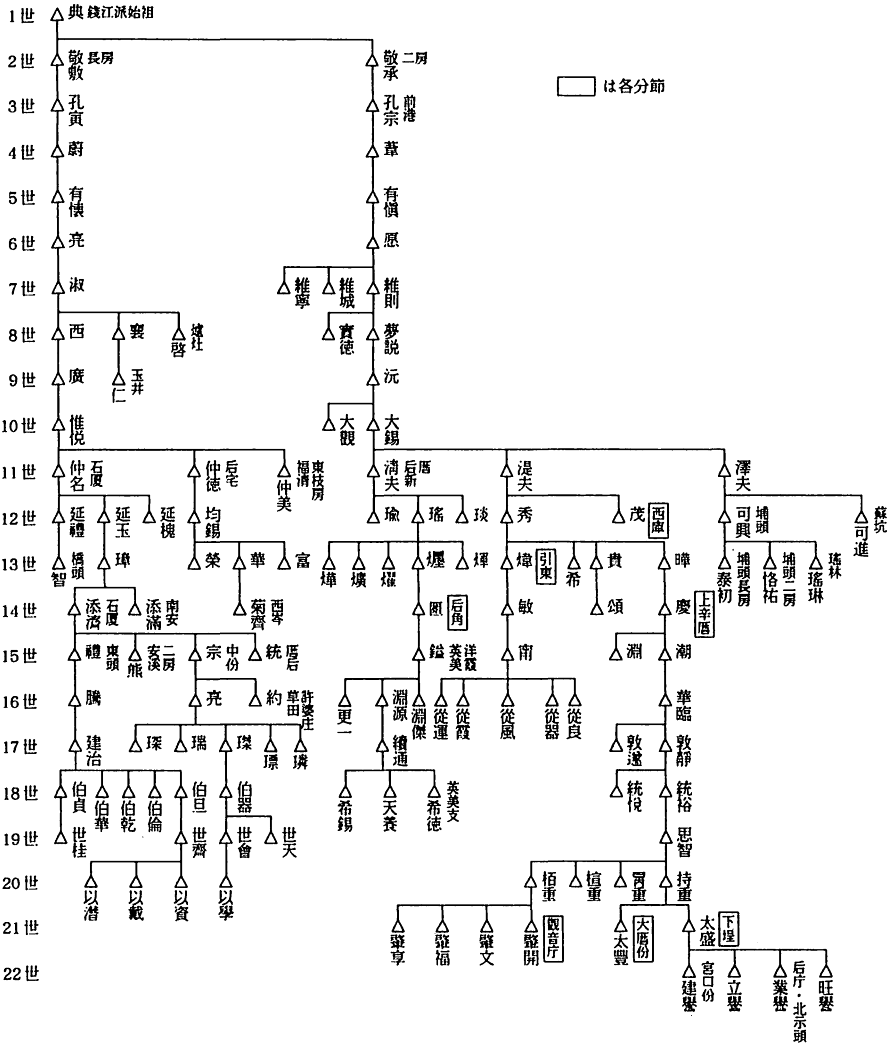


第2図　山美村の施氏一族の分節（角路）と祠堂の位置
出所）村民が描いてくれた地図に基づいて作成

ある。山美村の戸数は約400余戸で，全戸が施姓であり，隣村の榜頭村は全村が白姓の同族村（単姓村）である。

2．安溪施氏一族の系譜と分節

安溪施氏は銭江派に属し，第3図の銭江派族譜によれば銭江派始祖・典の長男・敬敷の系譜，すなわち長房の系譜と考えられてきた。台湾の嘉義県施姓宗親会でも安溪施氏は石厦から分節したと考えている[6]。また，銭江派の族譜では，石厦村の添濟の次男・熊が安溪へ移住したと記載されており，安溪施氏は長房派下の石厦二房の系譜と考えられてきた。ところが，安溪県龍門鎮山美村を訪問して『圍内施氏族譜』を見ると，安溪施氏は二房派下・敬承の系譜であり，しかも族譜の内容が異なっていた。それにもかかわらず，霞湯祖祠内の碑



第3図　錢江派施氏の系図

出所）施振民「菲律濱華人文化的持續」（『中央研究院民族学研究所集刊』第42期，1976年）p.194，施性水・施至徳主編『臨濮施氏族譜』（フィリピンで刊行，1961年）施學吉・施晢渡『臨濮施氏族譜』（台湾で刊行，1968年）より作成。

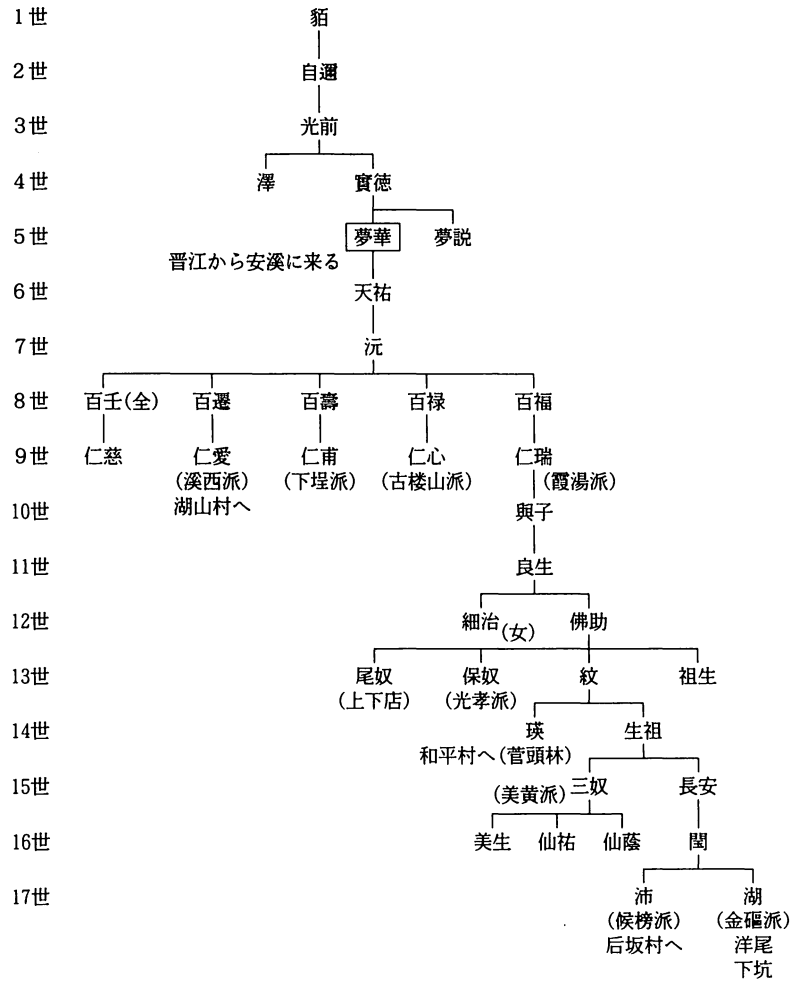
文には，次のように書いてある。

銭江始祖の典公には長子の敬敷と次子の敬承の2子があり，長房の敬敷は孔宙，蔚，有懐，亮，淑，廉，惟悦と続き，惟悦公には3子あり，長子の仲名は石厦，次子の仲徳は后宅，三子の仲美は安溪の夢華公へとつながる[7]。

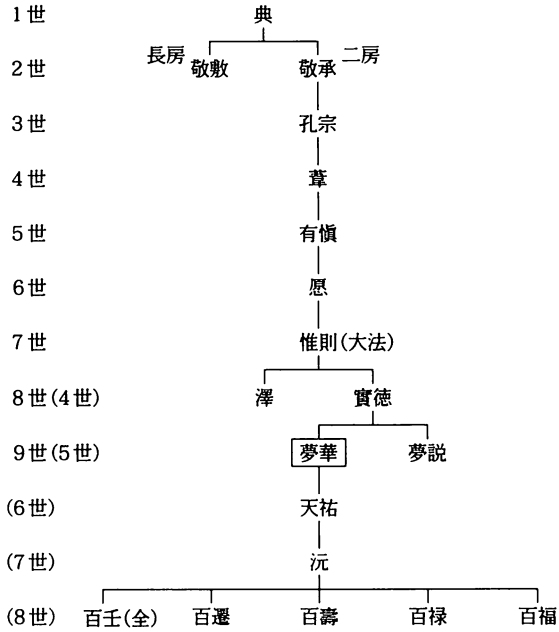
安溪施氏族譜は，戦乱や村の横を流れる小藍溪の氾濫による洪水で喪失した。そこで，手元に残った族譜を集め，記憶を頼りに何度か重修を行った。現蔵の族譜は中華民国丙寅年（1926年）に重修したものである。そのため安溪始祖から4世くらいまで，その内容は曖昧である，と村の長老はいう。『圍内施氏族譜』巻一「譜序・支図第一世至廿一世」を見ると，そこには二つの系譜が書かれている。一つの系譜は第4図のように，始祖の貊から2世の自迩，3世・光前，4世・實徳となっており，5世の夢華が晋江から安溪に移住したことになっている。貊は入閩1世で，王潮と閩王の王審に従って南下し，乾符甲午年(874年)から廣明（880年）・中和（881年～884年）の10年の間に福建に入ったとされている。

しかし，もう一つは第5図に見られるように，『圍内施氏族譜』の次頁には晋江の銭江派族譜と同じく，1世の典から2世・敬承，3世・孔宗，4世・葦，5世・有愼，6世・愿，7世・維則（大法）とあり，銭江二房派下であることが窺える。ただし，7世までは銭江派族譜と全く同じであるが，8世からその系譜は少し異なっており，第3図の銭江派族譜では8世の夢説と實徳とが兄弟となっている。しかし，安溪族譜では第4図・第5図とも8世が實徳で，夢説はその長子となっており，安溪へ移住した夢華は實徳の次子となっている。また，銭江派族譜では8世・夢説の長子である9世の沅は，安溪族譜では9世・夢華の孫となっており，夢華と沅との間には10世・天祐がいる。

さらに異なる点は，輩（世代）のずれである。山美村の長老達の話によれば，第4図の安溪族譜の1世から4世まではあまり信用できないと言い，銭江派族譜に類似する第5図の系譜の方が信用できるとしながらも，夢華を9世とはせず5世とし，以下の世系を6世・7世と4世代のずれがある。結局のところ銭



第4図　安溪施氏の系図（1）
出所）『圍内施氏族譜』より作成



第5図　安溪施氏の系図（2）
出所）『圍内施氏族譜』より作成

江二房派下から分節したようにはなっていない。

安溪施氏族譜にしたがえば，8世・實徳の次子・夢華が晋江から安溪に入った。しかし，族譜の世系は第5図のごとく夢華は5世で，7世の沅には5人の息子がおり，一房が百福，二房・百祿，三房・百壽，四房・百遷，五房・百壬となっている[8]。五房の百壬は宋末の岳飛の家臣で，岳飛をだまし討ちした秦桧に仇討ちしようとして逆に殺された施全としている。山美村にある華封堂はその施全を神（里主尊王）として祀っている。これが史実かどうかは誰にも分からない。

当初，5世の夢華は龍門鎮山美村ではなく，光孝村に移住した。彼は他者が自分の土地に入らないように盆栽でその土地を囲い込み，権利を主張した。そこでここを圍内と呼び，族譜も『圍内施氏族譜』と圍内という名称が残ってい

る。そして，夢華の5人の息子（族譜では孫）はここに祖廟・圍内祖宇を建立した。

安溪施氏の分節は，次のような形態で進展した。8世の5人兄弟には第4図に見られるように，それぞれ仁瑞・仁心・仁甫・仁愛・仁慈の男子がおり，ここから安溪施氏の分節が始まる。

8世・百福（長房）の子，9世の仁瑞は霞湯派と呼ばれ，最も発展する房となる。12世・佛助には4人の息子がおり，長子の祖生の系譜は断絶し，次子・紋は霞湯派の直系としてそのまま山美村に留まった。三男・保奴は光孝派として隣村の光孝へ移住し，四男・尾奴は上下店派（上店は角路の美店厝，下店は圳下）として山美村に一分節を形成した。13世・紋には生祖と瑛という二人の男子がおり，次子・瑛は菅林頭派として和平村菅林頭へ移住した。14世・生祖には長安と三奴の二人の男子がおり，長子・長安は直系を継承し，次子・三奴は村内で分化して分節・美黄派を形成し，黄厝に居を構えた。族譜では長安の孫・17世の湖は分節・金碚派を形成したとあるが，長老達は金碚派とは何を指すのか知らない。この系譜は22世以降に洋尾と下坑とに分節した。現在，同族の分節名あるいは角路名（地域名）としても洋尾と下坑は存在しており，金碚という名称は見られない。湖の弟の沛は侯傍派として村内に一分節・后坂を組織した。

8世・百福の派下・霞湯派は，族譜からその分節を見ると，以上のように山美村内に上下店・黄厝・洋尾・下坑といった分節を形成しただけでなく，さらに村外の光孝村・和平村へ分節していった。聞き取りによれば，山美村の分節はさらに分化し，洋尾・小坑・頂新厝（洋尾派）・下市（洋尾派）・黄厝といった下位の分節が出現した。村外への分節には后坂村・菅林頭（和平村）・四房（山寮村）・丁山（后坂村）がある。

百禄の長子・9世の仁心は村内に一分節・古楼山を形成し，派下はこれ以上に再分化はしなかった。族譜によれば，仁心の長子・與國は正統丙辰年（1436年）8月初2日に死亡していることから，分節は明代に行われていると想像が

可能である。

百壽の長子・9世の仁甫は村内に一分節・下埕派を形成し，この派もそれ以上には分化していない。

百遷の長子・9世の仁愛は山美村から少し離れた湖山村溪西へ移住し，溪西派を形成した。この派も湖山村でさらに再分化することなく，現在まで続いている。

百壬には長子・9世の仁慈がいるが，その後の系譜は断絶し不明である。ただ，既述したように，安溪施氏は百壬を秦桧に殺された施全とし，彼を後に神となった里主尊王であるとしている。村内の華封堂に祀っているのは里主尊王（施全）であり，嘉義県施姓宗親会では自分達の祖先が台湾へ移民する際にこの神像を携帯し，嘉義県鹿草郷施家村に村神として祀り，後に華封堂を建立したと考えている。しかし，華封堂の祭祀は大躍進以降に不可能となり，祭祀の対象や祭祀形態を具体的に答えられる人がほとんどおらず，この点は非常に曖昧である。さらに，里主尊王とは尪公のことであり，溪内にある霊護廟で祀っている里主尊王とは誰かと聞いてみても不明であり，施氏一族が里主尊王を施全であると主張するが，ある者は張姓の者であると主張していると，廟守は答え，結局のところ不明であった[9]。

以上のように，安溪施氏はまず最初に山美村に移住し，その後，村内と村外で分節を形成し，村外では光孝村・后榜（坂）村・和平村・湖山村へ分節した。山美村内の分節（角路）を地図上に落とすと第3図のごとくである。

III．社会主義建設と同族

1．安溪県龍門鎮の行政区画の組み換え

安溪県の解放後の行政区画の組み換えは，以下のようである[10]。1949年5月9日に第1次解放が行われ，9月3日に人民解放軍が入り，第2次解放となった。9月9日に共産党が政権を握り，正式に中共安溪県委員会と安溪県人民政府を設立した。県政府成立時に行政区画は4区となり，第1区の龍城区政府が龍榜

郷を管轄した。同年11月4日に龍榜郷を第2区が管轄し，同年12月に4区から7区に増加し，龍榜鎮は官溪鎮と合併して第2区となった。

1952年7月に『安溪県人民政府試行組織条例（草案）』第10条の規定により，全県を14区に区画し，第6区は龍門に政府を設置し，13郷を管轄し，その中に山美郷や湖山郷・榜頭郷といった名前が見られる。1955年9月21日に全県14区を12区とし官橋区が28郷鎮を管轄した。同年12月28日に安溪県人民政府は安溪県人民委員会となり，1956年6月8日に12区を7区とし，官橋区が15郷鎮を管轄した。1958年3月20日7行政区は28郷鎮となり，龍門郷が成立した。龍門郷は6小郷・14高級社を管轄した。1958年に人民公社化が行われ，9月15日から11月にかけて28郷鎮・109小郷・245高級社は9人民公社・231生産大隊に組み替えられた。

1961年8月15日に各人民公社は整頓されて人民公社の規模を縮小し，9人民公社は八つの区に91小人民公社・363生産大隊が組織され，小規模の人民公社へ分割された。例えば，官橋区には13の人民公社が成立し，山美村は中社生産大隊として榜頭人民公社に属した。榜頭人民公社は后坂大隊・榜頭大隊・大生大隊・光孝大隊・和平大隊・中社大隊の6生産大隊で構成される小人民公社となった。ところが，1965年4月18日に8区91人民公社は撤去され，15人民公社と城関鎮人民委員会，352生産大隊に改組され，龍門郷は龍門人民公社となり，25生産大隊で構成されるようになった。

文化大革命により1968年9月15日に安溪県革命委員会が成立し，1980年12月22日には安溪県革命委員会が再び安溪県人民政府となった。1984年4月17日に中共中央35号文件に基づく「政社分離」により政治組織と経済組織に分離し，人民公社を郷鎮人民政府とした。その結果，龍門人民公社は龍門郷となり，1991年11月には郷から鎮となった。1992年12月には全県が13鎮，11郷，10国営農・林・茶場，430村民委員会，14居民委員会で構成されるようになった。その結果，龍門鎮は31村民委員会（村）を管轄するようになった。

以上が龍門鎮の行政区画の変遷であり，基本的に解放前に存在した行政単位

は社会主義改造と建設の中で組み換えられはしたが，最小単位の集落（村）は変化することなく存続した。すなわち，山美村は社会主義改造・建設の中で一つの集団経済単位として変遷してきた。次に，この点をさらに詳しく考察してみよう。

2．同族の下位集団・分節と地域集団・角路との関係

土地改革や社会主義改造・建設において，同族の下位集団の分節と地域集団の角路との関係は，どのように変遷したのであろうか。

安溪県では1950年～1952年に土地改革が実施され，龍門鎮でも山美郷（現・山美村）を基礎にして土地改革が行われた。当時の本村の戸数と人口は110余戸・600余人と少なく，山美村の規模は土地改革を実行する行政単位として最適規模であった。応答によると，本村には耕地が少なく貧しいため，解放前に地主や富農は存在せず，耕牛を所有しておれば中農に規定され，耕牛を所有していなければ貧農に規定された。本村の大部分の農民は海外と関係をもっているため華僑工商業者に規定された。というのは，農民の多くは農業だけで生活できないため，海外からの送金に依存し，小商売をして生活を維持する者が多かった。それゆえ，土地改革として没収・徴収の対象となる土地は少なく，また分配できる土地もなく，土地改革の経済的意義は小さかった。しかし，安溪県全体の階級構成を見ると，華僑工商業者という成分は見当たらず，工商業者（0.59%）や小土地出租者（2.98%）・農村手工業者（1.21%）・小商販（1.46%）・自由職業者（0.28%）といった成分が見られ[11]，この数値から僑郷の実態を汲み取ることができない。本地域は在外華僑・華人との関係の深い地域であり，土地改革においては華僑・華人の土地をどのように扱うかは，大問題であった。が，県全体の統計数値にはこのような点を全く触れていない。

1953年に互助化が行われ，1955年に初級合作化が行われた。初級合作社は，山美郷に5社が組織され，光孝村に第1初級社，中社村（山美村）に第2・第3・第4初級社，后榜（坂）村に第5・第6初級社が組織された。山美村の第

2～第4初級社と角路との関係を見ると，第2初級社は洋尾（下店・頂新厝・下埕・下市を含む），第3初級社は美黄（上店・黄厝を含む），第4初級社は古楼山（下坑を含む）となっており，第2図に照らし合わせると，村内で居住空間が近い分節（＝角路）でもって初級合作社が組織されていることが判明する。

高級合作化は1957年に実施され，山美村には中社高級合作社が成立し，11の生産隊で組織された。生産隊と同族の下位集団の分節（＝地域集団の角路）との関係は，第1生産隊―下市，第2生産隊―圳下，第3生産隊―洋尾，第4生産隊―頂新厝，第5生産隊―美店［1］，第6生産隊―美店［2］，第7生産隊―美黄［1］，第8生産隊―美黄［2］，第9生産隊―小坑，第10生産隊―庵后，第11生産隊―古楼山と，分節（＝角路）を基礎にして生産隊が組織されている。

1958年の人民公社化時，龍門郷は官橋人民公社に属し，山美村は勝利生産大隊となり，大隊の下には10生産隊が組織された。勝利生産大隊下の生産隊は分節（＝角路）を基礎にして，以下のように組織された。第1生産隊―下市，第2生産隊―圳下，第3生産隊―美店厝，第4生産隊―黄厝，第5生産隊―小坑，第6生産隊―古楼山，第7生産隊―洋尾，第8生産隊―美店厝，第9生産隊―黄厝，第10隊―頂新厝と，ここでも生産隊と分節（＝角路）とが一体化していることが窺える。1961年8月には人民公社の規模が縮小されて，山美村は中社生産大隊として榜頭人民公社に属し，1965年4月に龍門郷は龍門人民公社となったが，生産隊は基本的に変化はなく，この人民公社の規模と組織単位は1980年代まで存続した。

1981年9月に入ると，龍門人民公社の中社生産大隊は山美生産大隊と改名し，1982年の「政社分離」により山美生産大隊は山美村民委員会となり，山美村に戻った。

以上のごとく，同族の下位集団の分節と地域集団の角路とは相互に関係しあい，社会主義の基層単位をなしてきた。

IV．同族組織と華僑・華人

1．安溪県出身華僑・華人と経済建設

安溪県は歴史的に多くの華僑・華人を輩出してきた，著名な僑郷の一つである。外国への移民は清代に始まり，清代では康熙年間1人，雍正2人，乾隆3人，嘉慶28人，道光70人，咸豊69人，同治106人，光緒254人，宣統4人と光緒年間が最多である[12]。民国期に入ると，移民は急増し，1949年まで続いた。安溪県の在外華僑・華人は約70万人で20余カ国に分布しており，そのうちの95%はインドネシア・シンガポール・マレーシアなどの東南アジア一帯に居住している。また，帰国華僑・僑眷は22万人を数え，全県総人口の27.1%を占めている[13]。1978年の安溪県僑務辦公室と安溪県僑聯会との僑情普査統計（センサス）によれば，本県出身の華僑・華人はシンガポールに18万5,309人，マレーシア18万675人，インドネシア22万3,020人，ビルマ4万9,511人，フィリピン1万2,194人，タイ1万2,766人，ベトナム1万6,131人，アメリカ1,652人，その他1,771人，計68万3,035人と，インドネシアが最多で，続いてシンガポールとマレーシアに多い[14]。

歴史的に華僑・華人は，故郷に対して各種の貢献をしてきた。その最大の貢献は，①親族や同族に対する送金と，②故郷への公益事業投資である。1950年～1990年の華僑送金を見たのが第1表である。第1表を見ると，送金額は年度により幾つかの変化がある。解放後の1950年代は送金額が約200万元を前後しているが，大躍進期から3年間の困難期に急減し，経済調整期と文革初期から徐々に増大している。特に，改革開放後には急増しているが，1980年代後半に入ると減少している。これは華僑・華人が故郷へ里帰りすることが多くなり，送金するのではなくして，故郷へ自ら直接金を持ち帰っているからである。

華僑・華人の公益事業投資は，1950年～1990年までが約1億元で，1991年～1993年が8,039万元であり，その投資は改革開放後に集中していることが分かる。公益事業への投資は学校教育投資が最大である。安溪県の在外僑胞は200余

第1表　安溪県1950年—1990年華僑送金額の推移

（単位：万元）

年度	金額	年度	金額	年度	金額	年度	金額
1950	154.2	1960	109.1	1970	171.1	1980	600
1951	225.1	1961	83.8	1971	181.6	1981	653
1952	246.5	1962	64.7	1972	203.4	1982	734
1953	204.2	1963	136.8	1973	257.4	1983	700.3
1954	174.9	1964	146.6	1974	302	1984	540.2
1955	187.3	1965	148.7	1975	352	1985	377.7
1956	200.7	1966	157.2	1976	353	1986	281.9
1957	224.1	1967	147.3	1977	392	1987	523.5
1958	157.6	1968	129.7	1978	436	1988	181.6
1959	102.9	1969	158.4	1979	511	1989	365
						1990	211.8

出所）陳克振主編『安溪華僑志』（厦門大学出版社，1994年）p.97。

万人もおり，民国期より寄付や学校経営などの故郷の教育投資を行ってきた。僑胞が創設した中学校は2校，小学校は17校を数える。解放後も教育投資は続き，特に中国共産党第11期三中全会以後，一層盛んになった。1987年～1989年の3年間において援助金や援助物資は1,644.35万元に達し，そのうち援助金は1987年423.67万元，1988年580.36万元，1989年640.32万元で，基本建設用の資金は1,417.14万元で，校舎建設4万6,238m²，設備購入92.84万元，教育基金設立19団体，基金77.3万元である。1989年末までに歴代僑胞建設の学校24校，僑胞援助の学校70校，学校敷地1,018.8畝，校舎建設面積1万8,182m²である[15)]。次に，橋・道路の建設と修理，水利施設や水力発電所の建設，病院建設，社会福祉援助，文化活動などがある。例えば，台湾から安溪県への寄付を見ると，第2表のように各範囲に渡っていることが分かる。中でも祖先を祀る祖祠への寄付が多い。

共産党政権は新中国建設において華僑・華人資金を導入するため，各種の華僑・華人政策を打ち出し，華僑・華人の投資を歓迎してきた。まず，1951年4月に安溪県帰国華僑聯誼会籌委会（準備委員会）を成立させ，1952年12月に安

第2表　台湾から安溪県への寄付状況

（単位：万元）

項目 / 氏名・団体	人数	寄付時期	金額	建設項目
黄瑞景		1986	110.00	学校・医院
王徳		1988～1989	82.00	祖祠・公路
高鏜		1990	62.00	公路
蘇参		至1990	40.00	学校・路
高銘都		1990	30.00	幼稚園
林水来		至1990	21.00	老人活動センター
林長青		1988～1989	14.23	祖祠・路・学校
林清標		1989～1990	13.50	橋梁
林長江		1988～1989	12.73	祖祠・路
詹記徳		1990前	11.00	学校
林文耀		1988～1989	8.63	祖祠・路・学校
白万春		1990	8.30	橋・学校
陳太平		1990	8.00	公路
林徳友		1989	8.00	路・その他
林玉質		1989	6.00	祖祠
高正		1990	5.00	公路
鄭河尚		1989	5.00	老人活動センター
劉天注		1989	5.00	祖祠
恒山謁祖団	9	1990前	15.00	祖祠
林孝義	4	1990前	6.00	祖祠
林坤	4	1989	5.00	学校
竹園謁祖団	22	1989	26.15	祖祠
張仁道	20多	1988～1989	15.00	祖祠
詹氏祖団	40多	1990	25.30	教育基金
林忠義	30多	1989	15.00	老人活動センター
李洵明	26	1988～1990	11.50	祖祠
新春謁祖団	30	1990	12.00	公路・学校
佛福公業団	21	1990	8.00	祖祠
吾宗謁祖団	14	1990	5.00	祖祠
恒美謁祖団	36	1990	11.00	鯉魚宮
鄭啓人	70多	1990	9.00	学校
碧一謁祖団		1990	14.50	公路・その他
高氏祖団		1990	7.00	祖祠

出所）安溪県地方志編纂委員会編『安溪県志(下)』（新華出版社、1994年）pp.902～903。
1990年12月までの5万元以上の団体と個人のみ。

溪県人民政府に華僑事務科を成立させた。1956年9月には安溪県第1期帰国華僑僑眷代表大会を開催し，安溪県帰国華僑聯合会第1期委員を選出した。1958年に安溪県僑務部門は『安溪郷訊』を創刊し，「郷訊」は在外華僑・華人と故郷とを結び付けるのを目的に発行され，社会主義建設の資金導入の役割を果たした。ところが，社会主義建設の高揚は結果的に在外華僑・華人を排斥することになり，帰国華僑や僑眷は迫害を受けることになる。『安溪郷訊』は文革前の1961年に停刊となり，1966年から始まる文革で帰国華僑聯合会の活動は停止し，同時に官橋・蓬萊・西坪・龍涓・白廂といった郷鎮の帰国華僑聯合会の活動も停止した[16]。

文革終了後の1978年に県と各郷鎮の帰国華僑聯合会は復活し，さらに龍門・虎邱・金谷・湖頭・尚卿・魁頭・長坑にも帰国華僑聯合会が成立した[17]。そして，1981年1月6日に『安溪郷訊』は復刊され，華僑・華人ネットワークが重視されはじめた。かつて文革により被害を受けた帰国華僑・僑眷に対して誤った階級成分規定を糾し，没収した家屋を返却し，奪った職場へ復帰させたりした。例えば，1982年に福建省人民政府は「関於華僑私房若干政策規定」を下達し，1984年～1990年までに華僑私房444戸，3,814間，総面積11万3,323㎡を返却した[18]。

1990年3月3日に安溪県人民政府は各郷鎮人民政府に僑務助理員の設置を決定した[19]。1980年に泉州市台湾同胞聯誼会安溪台聯小組が成立し，1990年9月に安溪県台属聯誼会が成立した。その後，各郷鎮の台属聯誼会も成立した。例えば，龍門郷台属聯誼会は1990年9月に西坪郷台属聯誼会は1990年10月，官橋鎮台属聯誼会と虎邱郷台属聯誼会は1990年12月に成立した[20]。1992年10月16日に世界各地に住む安溪出身者1千余人は世界安溪郷親聯誼大会をシンガポールで開催し，第2回世界安溪郷親聯誼大会を1994年10月に故郷の安溪県で開催することを決定した[21]。その結果，安溪中国旅行社では，改革開放後の1978年～1990年に接待した華僑・華人および香港・マカオ同胞は2万1,765人に達し，1990年の業務収入は50余万元，上納した税と利潤は20余万元となった[22]。

このような在外華僑・華人との関係修復は，華僑・華人からの送金や公益事業投資を急増させた。安溪は1985年に国家により対外開放県に認められ，外国から資金を導入し，多くの在外郷親が故郷に投資して企業を興した。また，華僑・華人の寄付により公益事業を興し，過去40年間で全県の華僑・華人の各種公益事業は１億元近くに達した[23)]。

２．華僑・華人と同族祭祀の復活

既述してきたように，晋江県から移ってきた安溪施氏は山美村・光孝村・后坂村・和平村・湖山村に分節を形成した。最大は山美村で400余戸・1,500余人，続いて光孝村が300余戸・1,500余人を数え，后坂村は1,000余人，湖山村は600余人である。

安溪施氏には解放前において，第３表に見られるように各分節に祖廟があった。これを具体的に見ていくと，

安溪施氏を代表する祖廟・施氏宗祠（圍内祖宇）は光孝村の圍内にあり，1994年にインドネシア在住の施姓からの寄付で重修した。宗祠内には寄付者の名前が額に貼り出されており，インドネシアや厦門在住者の名前，晋江市龍湖鎮石厦派の名前が見られる。また，再建落成記念を祝う額が多数掛けられており，

第３表　安溪施氏の各分節

分　節	宗祠・家廟	開基組	所在村	下位の分節	構成する村落
安溪派（圍内派）	施氏宗祠（圍内祖祠）	５世夢華	光孝村	安溪施氏の統括組織	施氏一族が住む龍門鎮各村
霞湯派	霞湯祖祠（百福祖宇）	９世仁瑞	山美村	光孝派，上下店派，菅林頭派美黄派，金碥派，侯榜派	光孝村，和平村，后坂村寮山村，山美村
古楼山派	百禄祖宇	９世仁心	山美村		山美村のみ
下埕派	百斖祖宇	９世仁甫	山美村		山美村のみ
溪西派	施氏宗祠（百濟祖宇）	９世仁愛	湖山村		湖山村のみ
	華封堂	８世百壬（施全）	山美村	台湾嘉義県鹿草郷施家村の華封堂でも里主尊王を祀る	

出所）『圍内施氏族譜』と聞き取りにより作成。

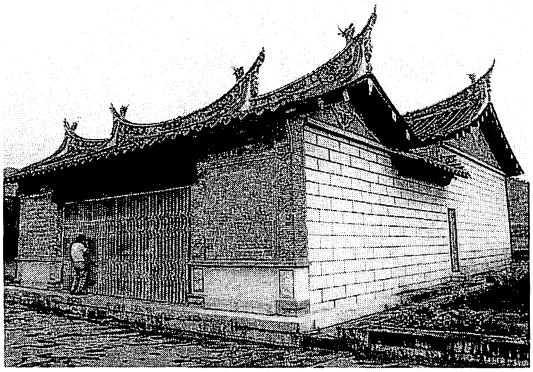


写真1　安溪施氏を代表する施氏宗祠(圍内祖祠)。1988年に修復がなされた。

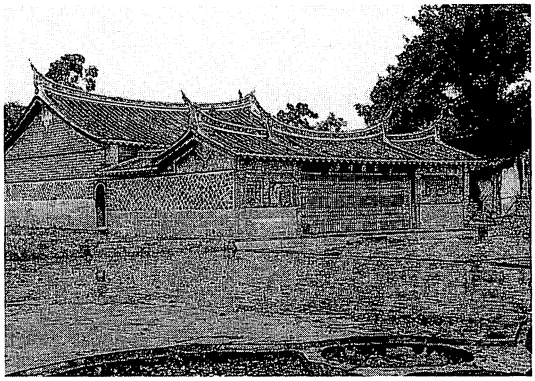


写真2　霞湯派の祖廟・霞湯祖祠（百福祖宇)。1994年に修復がなされた。

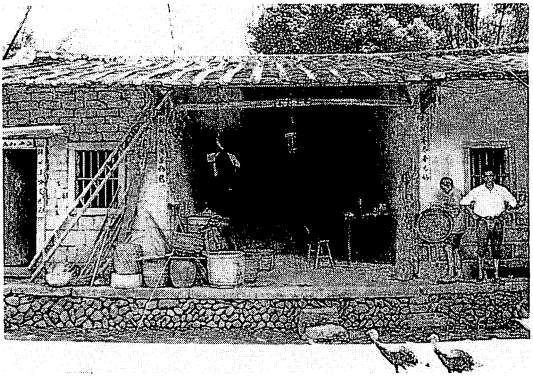


写真3　古楼山派の百禄祖宇。民家の一室に設けられている。

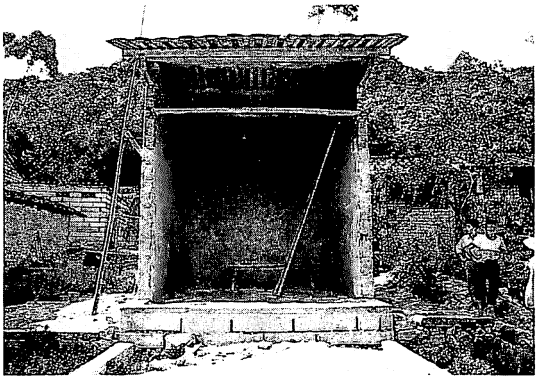


写真 4　再建中の下埕派の百壽祖宇。

写真 5　湖山村にある溪西派の施氏宗祠(百濟祖宇)。華僑・華人の寄付が届かず荒れたままである。

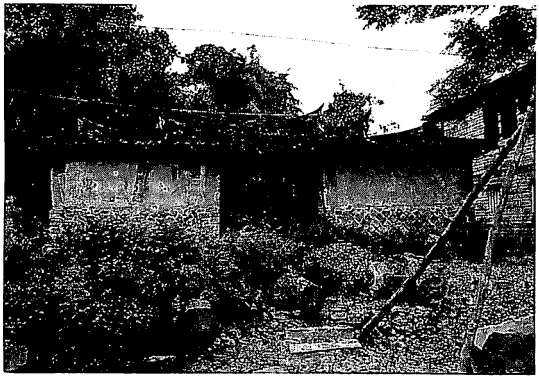


写真 6　里主尊王（施全）を祀る華封堂。台湾の嘉義県にも同じ華封堂がある。

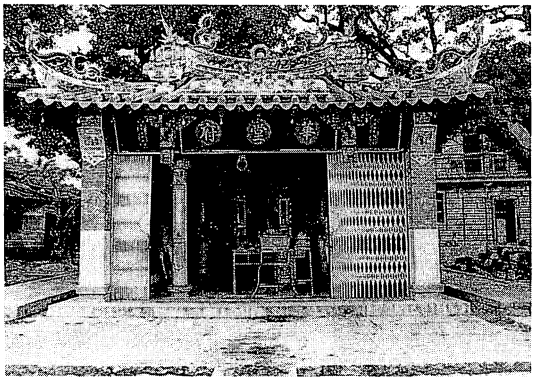


写真7　山美村の村廟・華堂府。

晋江石厦から四つと晋江臨濮堂から一つの額が掛けられている。その意味において安溪施氏は晋江施氏との結びつきが強いと考えられる。祖先祭祀は1988年冬至に再開し，経費は南洋華人から送金されて来る。具体的には，インドネシアからの基金が3万元があり，この利子を利用して祖先祭祀と饗宴（会食）を行う。安溪施氏の派下員は1,000余戸・約5,000人で，参加者は60歳以上の者に限定されており，1994年の祖先祭祀には140余人が参加した。管理人は同族の中で最も輩の高い者がなり，祭祀の準備をする。本祖廟内にはすでに位牌が祀られている。

霞湯派の祖廟・霞湯祖祠（百福祖宇）は山美村と榜頭村との境界にあり，これも1994年にシンガポール華人の施金城が寄付をして重修を行った。修廟の会計簿を見ると，第4表のように寄付金は南洋・台湾・国内からあり，預金利子などで収入は10万7,914元で，支出は9万9,427元となっている。その他の寄付者を見ると，第5表のごとくであり，シンガポールや香港・インドネシア，国内では江西省や福建省厦門市・同安県からの名前が見られる。分節の中で霞湯派は南洋華僑が最も多く，基金が豊富である。霞湯派の基金は5万元あり，施氏宗祠と同様にその利子5,000元でもって祖先祭祀を行う。祖先祭祀は春節と冬至（3日間）の2回行い，山美村だけでなく后坂村・光孝村・和平村・湖山村からも60歳以上の者が参加し，残りの経費でお昼に会食をする。

第4表　霞湯祖祠重修収支公布

（単位：人民元）

収　　入	金　額	支　　出	金　額
南洋からの寄付	107,914	工事労働者工賃	38,616.90
台湾からの寄付	5,400	各種木材	10,729.44
本郷からの寄付	1,500	屋根瓦	3,039
預金利子	6,718.85	鋼筋およびタイル	7,790.94
余剰品の転売	28	石灰	654.72
合　　計	121,560.85	セメント	3,222
		鉄釘	256.13
		砂土等	1,003.80
		火漆正金等	19,760.31
		石	1,338.50
		鉄大門	5,070
		電灯設備	706.50
		工事費用	557.10
		管理費用	3,685.70
		その他	2,995.9
		繰越金	22,133.8
		合　　計	121,560.85

出所）霞湯祖祠内の会計報告を筆写（霞湯祖祠重修建委会1994年10月1日）。支出項目の繰越金を除く支出合計は99,426.94元となるが、会計報告では99,427元と四捨五入してある。南洋と台湾からの寄付は全て人民元に換算されたものである。

山美村の古楼山派の百禄祖宇は財政的余裕がなく，修築は行えず，その建物は崩壊寸前である。また，祖宇には祖先の位牌はないが，簡単な祭壇が設けられている。そこには赤紙に里主尊王や祖叔大人・清水祖師・観音仏祖・福徳正神・玄天上帝・保生大帝などの名前が書かれてあり，その下に尪公（里主尊王）の写真が額に入れて祀られている。百禄祖宇は海外に華僑や華人が少ないことから祭祀を行う資金はなく，現在のところまだ祖先祭祀を行っていない。

山美村の下埕派の百壽祖宇はシンガポールからの資金援助で1995年8月16日から修築を始めた。しかし，建設中の祖宇はそれほど立派なもでなく，その壁は干乾しレンガを使用しており，見た目には粗末である。また，その傍らにはかつての百壽祖宇の石材が転がっており，恐らくこれも修理に使用するのであろう。

第5表　霞湯宗祠落成海内外宗親賀礼

出身地	寄付者	貨幣の種類	金額
シンガポール	施有土兄弟	人民元	1,000
〃	施才發	人民元	400
香港	施振宗	人民元	550
〃	施亜生	香港ドル	300
〃	施宏明	香港ドル	300
〃	施玉樹	香港ドル	300
〃	施慧清	香港ドル	300
〃	施炳禧	香港ドル	200
〃	施炳亮	香港ドル	200
〃	林淑貞	香港ドル	500
培文師範学校	朱福九	人民元	100
江西省	施培漢・施珠華	人民元	520
インドネシア	施金獅	人民元	1,000
〃	施金琢	人民元	1,000
厦門市	施金星・施金玉・施金輝	人民元	6,000
インドネシア	施水渠	人民元	1,000
シンガポール	施忠山	人民元	500
同安県	施瑞花	人民元	100

出所）霞湯祖祠内の合計報告を筆写。

湖山村の溪西派の施氏宗祠（百濟祖宇）はかつては立派な家廟であったと思われる。が，現在は荒れるにまかせたままであり，内部は物置となっている。溪西派は南洋華僑・華人が少なく，海外からの財政援助がないため修理は行われないままである。村民の応答によれば，湖山村には角路が桂湖・朴齊・溪西の三つがあり，桂湖には沈姓が約1,200人，朴齊には肖姓が約1,000人，溪西には施姓が約700人と，施姓は弱小勢力であり，南洋華僑も少なく，貧しいため，修理する財力がない。

山美村には百壬（施全あるいは里主尊王）を祀る華封堂と祖叔大人を祀る華堂府とがある。当初の農民の応答は華封堂と華堂府に祀る神について混同しており，非常に曖昧であった。村の長老の話では5世の夢華が華封堂を建立し，

後に祖叔大人（祖師爺）を祀ったという。そして，祖叔大人の神像は上流の榜頭村から流れて来たという[24]。村廟の華堂府は，小藍溪の傍ら，霞湯祖祠(百福祖宇)の横に立派に重修され，旧暦10月6日に祭祀が行われるようになった[25]。結局のところ祖叔大人とは誰かと議論したところ，施府王爺ということになった。

安溪施氏では，公益事業の郷村建設や寄付・送金において晋江施氏と異なり，非常に少なく貧しい。資料によれば，安溪県は台湾をはじめとした東南アジアへの移民が多いということであるが，安溪施氏一族においては少ない。そのため福建沿海地域と異なり，華僑・華人からの援助や寄付が少ない。その一方で，できるだけ華僑・華人からの寄付や援助を引き出すべく，海外との関係を強調している。その一つとして『安溪県文史資料』（内部発行）や『安溪郷訊』などに華僑・華人の記事が多く見られる[26]。

山美村についていえば，1982年に龍門鎮山美村出身の在外施氏一族が33万元を寄付をして培文小学校の新校舎を建設し，後にこの小学校は培文師範学校の付属小学校となった[27]。また，1985年～1986年に113.79万元を寄付して，培文師範学校を創設し，1985年9月に学生を募集し開学した。この師範学校は安溪県で初めての華僑経営の中等専門学校となった。1987年～1989年に409万元と，施氏一族はさらに各時期に分けて寄付を募って校舎を建設し，1993年末には総投資600万元，学校敷地50畝に377万元を投資し，寄付総額が1,000余万元に達した。1989年には6.3万元を費やして和平小学校を建設した。さらに1990年11月6日には培文師範学校の新校舎落成式典を催した[28]。

V．結語

晋江県から安溪県へ分節した施氏一族は，安溪県龍門鎮光孝村と山美村から同鎮内の他村へ分節するとともに，村内でも分化して下位の分節を形成した。さらに，経済的困難があれば外国へ移民し，龍門鎮は安溪県の中でも比較的多くの華僑・華人を輩出した僑郷となった。例えば，龍門鎮の全県に占める華僑・

華人の割合は，第6表のように蓬萊鎮の15%，官橋鎮12.7%に次いで多く，11.6%を占めている。帰国華僑・僑眷数も蓬萊鎮の16.3%に次いで12.4%と多い。龍門鎮人口は5万3,941人で，在外華僑・華人は7万9,403人である。具体的にはシンガポールに3万633人，マレーシア4,942人，インドネシア2万9,273人，ビルマ5,085人，フィリピン4,948人，タイ2,971人，ベトナム949人，アメリカ187人，その他415人である[29]。

安溪施氏は一族全体を統合する施氏宗祠を中心に結合し，最近，華僑・華人資金により宗祠の修建を行った。さらに各分節はそれぞれ自派の家廟を持ち，

第6表　安溪県華僑・華人・帰国華僑・僑眷人数統計

（単位：人）

地名	在郷総人数	華僑・華人		帰国華僑・僑眷				備項
		人数	%	合計	帰国華僑	僑眷	%	
鳳城鎮	24,092	6,153	25.5	3,120	56	3,064	12.9	
城廂郷	52,623	55,914	106	20,290	254	20,036	38.5	
参内郷	22,679	20,877	92.5	7,308	88	7,220	32.2	
魁斗郷	21,967	27,270	124	9,541	114	9,427	43.4	
蓬萊鎮	60,196	102,165	169	36,010	606	35,404	59.8	
金谷郷	40,587	55,133	135	17,220	264	16,956	42.4	
湖頭鎮	79,266	27,472	34.7	8,988	38	8,950	11.3	包括白瀬郷、湖上郷
剣斗鎮	32,473	5,030	15.5	2,082	26	2,056	7.8	
感徳郷	47,312	5,442	11.5	2,232	42	2,190	4.7	包括桃舟郷
祥華郷	29,582	5,085	17.2	268	34	234	0.9	包括豊田郷
藍田郷	21,007	3,528	16.8	1,166	48	1,118	5.6	
長坑郷	53,376	8,940	15.3	4,482	86	4,396	7.7	
官橋鎮	62,279	86,529	139	25,710	350	25,360	41.3	
龍門郷	53,941	79,403	147	27,456	315	27,141	50.9	
虎邱郷	54,383	55,347	138	16,256	188	16,068	30.0	包括大坪郷
西坪郷	39,554	21,453	54.2	7,480	68	7,412	18.9	
尚郷郷	29,834	61,286	205	13,345	286	13,059	44.7	
蘆田郷	12,774	9,358	73.3	2,164	61	2,103	16.9	
龍涓郷	56,195	46,650	83	15,874	170	15,704	28.2	
合計	814,141	683,035	83.9	220,992	3,094	217,898	27.1	包括農林茶場

出所）前掲『安溪華僑志』p.88。本表は1987年の統計数値。

近年にこれも修築している。ただし，海外に有力な華僑・華人ネットワークを持たない分節は資金繰りに困り，いまだ家廟を修理できないままでいる。とはいっても，今後，華僑・華人ネットワークを修復することにより，祖先祭祀も可能になるものと思われる。

このような同族組織や下位分節の家廟の修築が可能となったのは，解放後も在外華僑・華人との関係が切れていないことによるものである。また，改革開放後に容易に族的活動を再開することができたのは，社会主義改造・建設の中でも，言い換えれば社会主義的政治イデオロギーが突出した各種政治運動の中でも，基本的に族的結合が解体されなかったからである。なぜ解体されなかったのか，それは社会主義改造や建設を急ぐあまり，伝統社会を根底的に解体する余裕がなく，同族組織の下位集団である分節あるいは村内の地域集団である角路を基礎にして社会主義の集団単位を形成したからである。そうすることによって社会主義改造や建設は容易となり，伝統社会は温存された。華南農村におけるその伝統社会とは同族を基礎とした結合様式であり，経済建設の基底にこの族的結合が大きく作用しているのが特徴である。

改革開放はこれまでの自力更生路線を放棄し，外資導入による経済開発に主眼をおくようになった。すなわち，華僑・華人政策は大きく転換し，華南農村では華僑・華人の力を借りて経済を開発させようと，彼らの祖国に対する「愛国主義」を高く評価し，華人資本を導入しはじめた。僑郷においては再び「靠僑靠吃」（華僑に依存する）が頭をもたげ，本地域の同族組織もこの流れに乗って自己の利益を求め始めたようである。

注

1）これまで以下のような論文を発表している。「中国における同族組織の展開とその実態―福建省晋江県の施氏同族と地縁組織の関係―」（共著，『アジア経済』第30巻第4号，1989年4月），「中国における同族組織の分節形成と祖庁について―」（共著，『アジア研究』第36巻第4号，1989年12月），「台湾への移民・開発・定住と同族組織の形成―」（関西大学『経済論集』第41巻第6号，1992年3月），「移民社会台湾の同族結合と宗親会の形成―台湾華人社

会研究序説—」（関西大学『経済論集』第42巻第1号，1992年5月），「中国的同族組織與農業集団化」（共著，香港・珠海文史研究所学会主編『羅香林教授紀念論文集（上）』1992年12月），「福建省晋江県満族粘氏の台湾移住とその族的結合—」（『中央研究院台湾史田野研究室論文集(1)』1992年12月），「僑郷における同族ネットワーク—施氏一族の分節化と社会主義基層政権と経済建設—」（関西大学『経済論集』第43巻第2号，1993年6月），「福建における同族結合とその分化—施氏一族の移住と分節化—」（関西大学『経済論集』第44巻第3号，1994年8月），「福建僑郷における郷村建設と経済開発—福建省晋江市龍湖鎮の華僑援助—」（関西大学『経済論集』第44巻第6号，1995年3月），「中国伝統社会と華僑・華人—福建僑郷における郷村建設—」（『現代中国』第69号，1995年7月）

2）前掲「移民社会台湾の同族結合と宗親会の形成—台湾華人社会研究序説—」を参照されたい。

3）安溪農村での調査は今回が初めてのことであり，調査村へつなぐパイプがなかった。そこで，嘉義県施姓宗親会の施金水氏から安溪施氏の関係者を紹介して戴いた。また，厦門大学台湾研究所の雷慧英女史の協力を得て，厦門大学出版社の周総編集長から安溪県長への紹介状を戴いた。安溪へは厦門からの悪路をタクシーで走り，まず最初に県政府を訪問した。そして，県長への紹介状を渡して要望を伝え，県招待所である安溪賓館で待機した。その結果，県政府辦公室から滞在中，各種の配慮を受け，翌日，龍門鎮山美村を訪問することができた。また，施金水氏から紹介して戴いた県政府農業局副局長の施建寧氏や安溪県博物館館長の黄炯然氏の協力を得て，より内実のある研究が可能となった。施建寧氏は山美村へ同行してくれ，県政府の世話で「上から」村に入る調査に比較してより一層詳細な調査が可能となった。黄炯然氏は文献等を色々紹介してくれ，研究の助けとなった。今回の調査は駒沢大学仏教経済研究所の都通憲三朗氏と筆者のゼミ生で貴州大学に留学している図左篤樹君の協力を得た。本誌を借りてこれらの諸氏に感謝したい。

4）安溪県地方志編纂委員会編『安溪県志（上）』（新華出版社，1994年）p.1。陳拱「安溪県行政建置与区画演変」（安溪県県志工作委員会編『安溪方志通訳』8，1990年6月）p.29。『泉州晩報』（泉州晩報周末特刊）1995年9月8日の安溪県紹介の欄。

5）同上『安溪県志（上）』pp.60～80。同上「安溪県行政設置与区画演変」pp.29～33。

6）華封堂重建委員会『華封堂重建紀念特刊』（1993年11月）p.8。

7）霞湯祖祠内の碑文「始祖唐代入閩概況」。すなわち，安溪施氏始祖の夢華は石厦から出たことになっている。

8）農民達は，百福・百祿・百壽・百遷・百壬の5人は夢華の子供と考えており，話の中にしばしばこのような見解が出てきた。

9）本地域の施氏一族は，祖先の施全こそが里主尊王であると理解して里主尊王を祀っており，台湾嘉義県施姓宗親会の施氏一族も嘉義県鹿草郷施家村の華封堂に里主尊王を祀っているが，霊護廟の廟守は異なる説が多数あって，施全が里主尊王であるかどうかは疑わしいと言う。

10）前掲『安溪県志（上）』pp.60～80。前掲「安溪県行政設置与区画演変」pp.29～33

11）同上『安溪県志（上）』pp.178～179。
12）陳克振主編『安溪華僑志』（厦門大学出版社，1994年）pp.17～18。
13）前掲『安溪県志（下）』p.847，同上『安溪華僑志』p.1。
14）同上『安溪華僑志』，p.26。
15）同上書，p.145。
16）同上書，pp.8～9。
17）同上書，p.145。
18）同上書，p.10，pp.148～150，p.160。
19）同上書，p.13。
20）前掲『安溪県志（下）』p.902。
21）前掲『安溪華僑志』，pp.84～85。
22）同上書，p.145。
23）同上書，p.3。
24）結局のところ華封堂に祀っているのは里主尊王であり，華堂府に祀っているのは祖叔大人ということになった。しかし，華封堂は村にとってあるいは施氏一族にとってどういう存在なのか不明のままである。華封堂は修理がなされず荒れるにまかせたままであり，廟内には神像が祀られていない。それゆえ，村廟は華堂府ということになる。
25）この横には榜頭村の白氏一族の白氏宗祠と村廟の華湯府があり，村廟には田都元帥を祀っている。
26）1926年の日本統治時代の資料によれば，漢人人口は88.4％を占め，そのうち漢人の原籍地は福建が83.1％，広東が15.6％である。福建のうち同安県が14.7％で，次に多いのが安溪県の11.8％となっている。鐘中培「安溪移民台湾史述」（『安溪県文史資料』1992年1期）p.8。また，同文史資料には，台湾プラスチックの王永慶氏を安溪県出身者であるとして特集を組んでいる。陳克振「安溪華僑分布五大洲」（安溪県県志工作委員会編『安溪方志通訊』創刊号，1986年3月）もその一つである。
27）前掲『安溪華僑志』p.110。
28）同上書，pp.12～13，p.108，pp.151～157。
29）前掲『安溪華僑志』p.91。